

#書評



日本の医療課題に答える道 ＝“ジェネシャリスト”

評者 徳田安春

群星沖縄臨床研修センター



The GENECIALIST Manifesto ジェネシャリスト宣言

岩田健太郎＝著

定価：本体 2,000 円＋税

A5・228 頁／中外医学社／2018

[ISBN978-4-498-04864-5]

日本が直面している医療課題は深刻化している。特に、超高齢社会によるマルチモビディティー患者の増加、在宅ケアのニーズ増大、ポリファーマシーと過剰医療の問題、診断エラー対策、などだ。このような山積する医療課題に対して増加すべき診療科として期待されていたのが、「総合診療科」や「家庭医療科」であった。

しかし、2018 年度からスタートした日本専門医機構の専攻医登録者数をみると約 180 人（全登録者 100 人中 2 人程度）にとどまった。各種メディアは、「総合診療は惨敗した」と報道した。

だが今でも、総医師数約 31 万人のうち、日本プライマリ・ケア連合学会と日本病院総合診療医学会の会員医師は合わせても 1 万数千人弱程度であり（100 人中 3 人程度）なので、惨敗というより、もともと少なかったのであり、今回の専攻医登録数も同程度だったということなのである。

また、このようなプライマリ・ケア医志望者の減少あるいは停滞は、先進国共通の現象である。先進国の若い人は、職場は「病院志向」であり、診療科は「専門医志向」なのである。例外は、米国のホスピタリストだ。このモデルは、分業を極めた米国だからこそ発展させることができる総合系医師であり、日本への直輸入は難しい（そこで私は“日本型ホスピタリスト”をソリューションとして提唱している）。

仮に、総合診療はまたもや勝てなかった、というのが今回の正しい表現であるとしても、それでは冒頭にあげた日本の医療課題に答えるためのソリューションは何だろうか？

そんな時、岩田健太郎氏による本書が登場した。週刊『医学界新聞』で連載されていた時も、いくつかの記事は読んでいたが、毎回の記事の内容がそれぞれ多岐にわたっており、その時もたしかに面白かったのではあるが、全体を一気に読んで初めて哲学的メッセージを飲み込むことができた。哲学や思想を論じるものについては、断片化された連載記事ではなく、1 冊の書籍として読むことは大切だな、と思った。

岩田氏のソリューションは、この本のタイトルである。そして本人が、“ジェネシャリスト”の 1 人だ。北京で家庭医をしていたという経験もあるだろうが、ジェネラルな分野の勉強を進めてジェネシャリストになることができたのは、本人の知的好奇心と努力もかなりあっただろうと思う。しかし本人は、ジェネシャリストへの進化の必要性について、哲学的根拠を与えている。ヘーゲルよりカント、二元論は差別を生むからやめよう、と。そして、この用語をヴィトゲンシュタイン流に慣用化して意味を与えたのだ。

岩田氏が提案するジェネシャリストへの道は、楽な下り坂ではない。やっつけ仕事の“なんちゃってジェネラル”ではいけない、としている。質の高いジェネラル診療もできるジェネシャリストだ。しかしそれでも、岩田氏はジェネシャリストへの進化が、日本の医療におけるクラス闘争を終戦させ、課題を解決できる唯一の選択肢としている。

唯一かどうかは歴史が決めることであるが、私は大歓迎だ。私は以前、JCHO（独立行政法人 地域医療機能推進機構）本部顧問であった当時、本部や病院の若手医師らとともに、すでに専門的診療に長年従事していた医師を対象とする、やっつけ仕事ではないジェネラル診療を勉強できるプログラムをつくった。スペシャリストがジェネシャリストに進化するのを応援したい、という気持ちからつくったのだ。その気持ちは今も変わらない。本書が日本の医学生・研修医・専攻医・専門医に広く読まれることによって、岩田氏に続くジェネシャリストになる人々が数万人となれば、歴史は唯一のソリューションであったことを認めてくれるだろう。

